

## 漢字はホントは面白い X

部首とは何か

杉本 浩

この連載も遂に 10 回目を迎えました。だんだん書きたいネタも尽きてきて、何を書こうか苦心しております。是非ご希望のテーマをお聞かせください。

今回のテーマは「部首」。中学校の国語の授業みたいだ、とお思いかもしれませんが、なるべく「へえ、そうだったのか」と意外に思われる話を書いていきたいと思います。

部首といえば、「にんべん」や「くさかんむり」など、漢字を構成する部品のうち他の字と共通するかたちを取り出したもの、というのが普通の認識でしょう。「梅」や「松」の部首は「木<sup>へん</sup>」というのはすぐにわかりますね。でも、「和」の部首は「禾」か「口」か、「次」の部首は「丷（にすい）」か「欠」か、すぐにお分かりになるでしょうか（この答えは私の HP「漢字教育士ひろりんの書齋」⇒「漢字分解字典」で！）。

中国の後漢の時代、許慎<sup>きよしん</sup>という学者が、漢字の成り立ちを説明した初めての字書「説文解字<sup>せつもんかいじ</sup>」を作りました。西暦 100 年のことです。この字書は、当時使われていた漢字 9353 字を見出し字として収録していますが、検索するためにはこれを分別して配列する必要があります。許慎は

漢字を、意味を表す部品ごとにグループ分けすることを思いつき、そのグループを「部」と呼びました。その部の中で共通する部品そのものをグループの先頭に置いたので、これを「部の先頭」、すなわち「部首」と呼ぶようになったのです。

部首となる字もグループの一員ですので、当然ながら、単なる図形ではなくて意味を持つ漢字でした。

The image shows the seal script (篆書) form of the Chinese character '河' (river). It is a stylized, symmetrical character composed of several vertical strokes and a central horizontal element, typical of ancient Chinese calligraphy.

「河」  
篆書

例えば、「さんずいへん」は今では「氵」と書いて、漢字というより記号のように見え

ますが、説文解字が親字の表示に採用した

「篆書<sup>てんしよ</sup>」という書体では、さんずいへんも

「水」そのものもまったく同じ字なのです。

ですから、「水部」にはさんずいへんの字だけでなく、「水」そのものや「氷（したみず）」を使う字も含まれます。

そのほかにも、「艸（くさかんむり）」は元は「艸（ソウ）」という漢字、「辵（しんにょう）」は「辵（チャク）」、「刀（りっとう）」は「刀（トウ）」という具合です。

ややこしいのは「阝」。左にあれば「こざとへん」、右にあれば「おおざと」という別々の部首ですが、元は前者が「阜（階段または丘陵の意）」、後者が「邑（都市の意）」という異なった漢字でした。それぞれの字形が時代とともに

に変化し、現代では全く同じ形になってしまいました。



今ではほとんど使われませんが、「瘡（やまいだれ）」も一つの漢字でした（音ダク）。左の甲骨

「瘡」 文は左右反転していますが、右に90度回して  
甲骨文 見てください。ベッドの上に病人が寝ています。

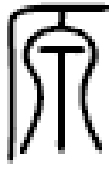
熱病なのか、汗をかいているようです。

こうして許慎は、すべての収録字を部に分けて行きましたが、意味と形による部分けを厳密に適用し、「木」と「林」を別の部としたことなどにより部の数が増え、また属する字が少ない部も多くなり、例えば「能」「率」「克」「易」などの字は、部首字ではあるけれどほかに属する字がない、という状況です。

結果として部の数は540にのぼりました。

また、例えば「考」が「老部」だったり、「亭」が「高部」だったりという例外も多く、引きたい字の部のページを見つけるだけで一苦勞です。さらに、部のページにはたくさん（少ない場合もありますが）字が無秩序に（許慎さんに言わせれば原則があるようですが）並んでいて、その中から目的の字を探すのにまた一苦勞、というありさまでした。

現代の漢和辞典には五十音索引、画数索引などが備わっ



「原」篆書  
何画かな？

ていて、部首索引を使う人は少数派だと思います。しかしこの時代は、発音で検索するには地方によって発音の隔たりが大きく、また親字の

「篆書」はグニャグニャした書体だったのではっきりした画数も分かりづらく、検索するためには部首で分類するしかなかったのだと思われます。

その後、中国の字書では部の数の削減が進められます。明代には 214 部に分類した字書が作られ、その後清代に成立した「康熙字典」(1716 年)でもこの部数が踏襲されました。

説文解字の 540 部からみると半数以下にまとめられ、「同じ形は同じ部首」という方針になっているので、部首から検索するには便利なのですが、「意味ごとに部を分ける」という方針は弱められました。

例えば、「乚(なべぶた)」は独立した漢字ではなく、説文解字にも載っていませんが、康熙字典はこの形を含む漢字を「乚部」としています。「亡」「交」「亥」「京」などの字がこの部に編入されることにより、廃止できる部が生じたわけです。

さて、康熙字典が中国の字書の一応の終着駅ですが、部首の問題は日中双方でまだ続きます。

日本では、第二次大戦後の国語改革で、当用漢字に新しい字体が定められました。いわゆる「新字体」です。新字体は、旧字体の複雑な部分を簡略化してできたものが多いのですが、この際に部首の部分を略体にした場合があります。

例えば、「単」は旧字体の「單」の上部を略体にしていますが、單の部首は略された「口」だったのです。つまり、今までの部首を踏襲しようと思っても、新字体にはその部首が影も形もない、という状況になったのです。

辞書編纂者は困ったに違いありません。やむを得ず、「ツ」という部首を作って、これに対処した辞書が多いようです。ツの部には、単のほか、巢（旧字体は巢、ㇿ部）、営（營、火部）、嚴（嚴、口部）などの字が集められています（「ツ部」を新設せず、単を十部、巢を木部、営を口部、嚴を父部としている辞書もあります。苦労が偲ばれます）。

ここまででお分かりのとおり、「それぞれの漢字の部首は誰が決めるのか」というと、辞書（字書）の編纂者だ、ということになります。「この字の部首は何か」というクイズがよくありますが、正確には、例えば「康熙字典では」などという限定が必要になります。

新字体と言えば、本場中国では簡体字の部首はどうなっているか。中国では国家規格として「漢字部首表」が定められ、2009年の同表で、201の「主部首」（「水」など）と100の「附形部首」（「彳」など）が規定されています。

統一的に国が決めるか、民間の辞書会社が工夫して決めるか。ユーザーとしては、どちらが使いやすいでしょうかねえ。